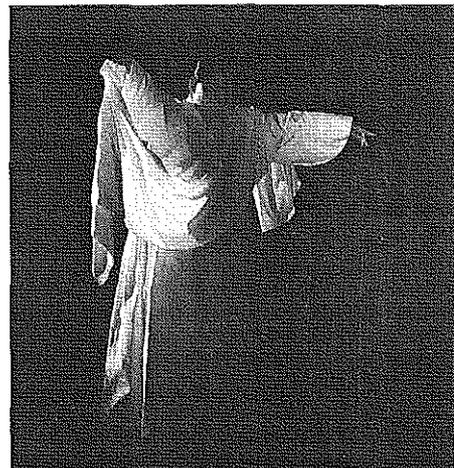




NO. 18 1995. 11

(株)九州地域計画研究所



韓国の三大名刹のひとつ通度寺の塔頭の境内で見た、古典舞踊のサルブリ。深山の真っ暗な中でライトを少しつけて舞われ、幻想的な空間が広がった。(本文13頁)

も く じ

〈NETWORK・ネットワーク〉

2. 筑豊三都物語(飯塚、田川、直方) —それは燃石ではじまった
7. 佐賀は何の首都を目指していくのか? —「アジアス九州シンポジウム」からの報告
9. SAS全国大会in九州—風のふくおか、スースーはかた、ここはあなたにとととと
10. 韓国の人たちとの交流で“近くて遠い国”との距離がずっと近づいた
—SASの12人で行ったパーソナル交流体験記
15. 統計からは見えない家族のあり方、住まい方 —東北大学・近江隆先生を招いて

〈見・聞・食〉

16. 「しじみ定食」に「しじみドリンク」!? —青森県市浦村しじみの特産品づくり視察
17. 「おおとう生まれのしじみです」しじみDay —大任町しじみ試作品展示会
19. 食場日誌

〈近 況〉

19. 私の近況 /カラスと都市・久々の外泊達成・EM菌入りのガラスの効きめは?・好きな有田焼で珈琲を楽しむ・披露宴のスピーチのような……・長寿社会のまちづくり研究会活動報告

〈本・BOOKS〉

22. 「失われんとする一朝鮮建築のために・柳宗悦 著」 —韓国国立中央博物館(旧朝鮮総督府)の取壊しをどう考えるか—
24. 「入門ビタミンC健康法」 ビタミンCと健康を考える会 編著

筑豊三都物語（飯塚、田川、直方）

— それは燃石ではじまった —

〈筑豊という名称〉

福岡県の南東部、大分県との境に、修験道の地で知られる英彦山山地がある。ここを源にする遠賀川は、県中央部を北部の響灘に向かって流れている。筑豊地域は、この遠賀川沿いに広がる盆地の総称であり、この沿岸地域には宇佐八幡や大宰府安楽寺などの荘園も数多くあったといわれ、農耕の盛んな地域であったようである。

ここで少し福岡県の成り立ちに触れると、現在の福岡県は、豊前国、筑前国、筑後国の三つの国から成り立っているが、江戸中期以降は7藩で統治され、明治初期には、福岡藩（筑前国）、秋月藩（福岡支藩）、小倉藩（豊前国）など10藩、さらに明治4年の廃藩置県によって、三つの県（福岡県、小倉県、三潞県）となり、これらが統合されて今の福岡県の姿となっている。

つまり筑豊国、筑豊藩という名称は一度もなく、この名称の由来としては、筑前国の一部、豊前国の一部が、盆地の中央を流れる遠賀川の兩岸にあったため、これを合わせてつけられた地域名である。

〈江戸時代は九州の表通りだった〉

江戸幕府と直結する官道、参勤交代の道は、この筑豊地域を南北に縦断していた。江戸の頃は、九州の玄関口である門司から小倉を経て、黒崎、木屋瀬、直方、飯塚、内野、山家、原田（これらは筑前六宿と呼ばれていた）、そしてここで、佐賀—長崎へ通じる長崎街道、熊本—薩摩へ通じる薩摩街道に分かれるのである。この筑前六宿が当時の九州の表通りで

あり、筑豊地域はこの通りに位置する繁華街であったと言える。したがって、当時から飯塚や直方には、商業的な機能の集積が進んでいたようである。

〈燃石と呼ばれた石炭〉

石炭の発生・使用を示す根拠としては、江戸時代に貝原益軒が書いた「筑前国続風土記」〈1703〉の中に「燃石」という表現で記述がなされている。その中には、当時は水風呂を焚くのに使われるのが一般的だったようだが、やがてかがり火や製塩燃料などに活用され、生活利用から産業用に使われるようになった。商品としての「燃石」利用の始まりである。

〈需要を喚起した製塩、蒸気船〉

石炭が商品価値の需要を高めたきっかけは、瀬戸内沿岸の製塩用燃料であり、さらに全国的な需要をもたらしたのは、日本開国による蒸気船建造技術の

筑豊の年譜

1703（元禄16）	貝原益軒の「筑前国続風土記」に「燃石」記述
1763（宝暦13）	瀬戸内海沿岸へ製塩燃料として若松から移出
1816（文化13）	福岡藩が、芦屋、若松に「焚石会所」を設置
1830（天保1）	筑前国の石炭出炭量、約4万t
1844（天保15）	当時、小倉藩が、田川郡赤池に「焚石会所」を設置
1858（安政5）	日本開国により蒸気船燃料の需要増加。
1872（明治5）	鉱山開放令により、採炭や販売が自由化される
1873（明治6）	三池炭鉱、政府の官営となる
1877（明治10）	筑豊炭田の坑数341坑、年産約10万t
1887（明治20）	全国出炭量175万t、筑豊41万t、23.5%を占める。
1889（明治22）	三井・三菱・住友などの中央資本の筑豊への進出
1891（明治24）	若松—直方間鉄道開通、石炭の河川輸送から鉄道輸送への転換始まる
1895（明治28）	小倉—行橋—伊田間に豊州鉄道開通
1901（明治34）	官営八幡製鉄所創設
1910（明治43）	筑豊の出炭量781万t、全国の出炭量約1,570万tの48%を占める。
1919（大正8）	第一次大戦による工業躍進、全国出炭量3,127万t、筑豊炭田の出炭量1,522万t、全国の49%。
1921（大正10）	これ以降、北海道の炭田開発が本格化、筑豊炭の需要が減少、炭鉱合理化、効率化が進められる 筑豊の炭坑数106、鉱夫数113千人

伝来による燃料需要と言われている。しかし、この段階では、内陸の筑豊の石炭需要よりも、海岸に近い三池や唐津、長崎などの石炭の需要が多かったようである。

出炭量は、1877年（明治10）の頃は、筑豊では10万tだったものが、10年後の1887年（明治20）には41万tへ4倍の伸びとなっている。この当時の用途は、50%が製塩用であり、次いで蒸気船燃料30%、工場や鉄道20%という比率になっている。

〈河川輸送から鉄道輸送へ〉

当時の内陸筑豊における石炭輸送は、遠賀川を活用した河川輸送であり、農産物などを運搬していた「川船（かわひらた）」（吃水の浅い舟）という舟を使っていた。しかし、1891年（明治24）に若松から直方、さらに1893年飯塚までの鉄道が開通し、その2年後の1895年（明治28）には、小倉から行橋経由の田川伊田の間に鉄道が開通したことにより、筑豊の石炭輸送体系は、河川から鉄道へ移行する。

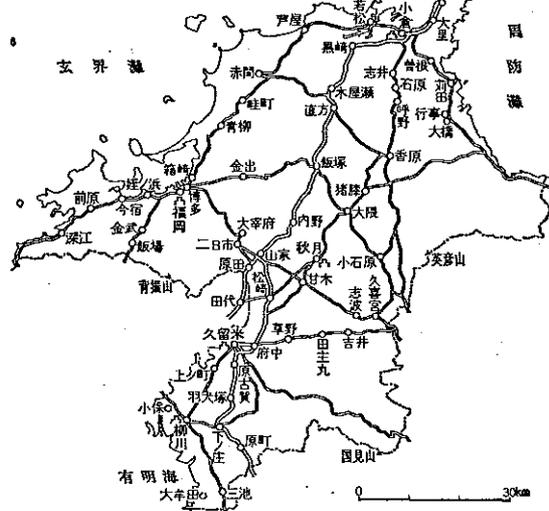
これらの輸送体系が完成したことにより、1901年（明治28）には、重化学工業の発端となる官営八幡製鉄所が創始される。製鉄所による石炭需要と輸送体系の整備によって、三菱、三井、住友などの中央資本の筑豊進出が活発となり、これ以降、筑豊炭田は、北九州工業地帯の隆盛と共に、日本の石炭産業重要な役割を担う地域となっていく。

〈経済恐慌、不況、戦争、そして合理化〉

日本の石炭出炭量は、1940年（昭和15）の約5,600万tがピークであり、その時の筑豊の出炭量は約1,900万tであり、明治中期以降の筑豊の地位からみるとかなり低くなっている。しかし、第一次大戦により一時期の復興は見られたものの、大正後半から北海道における大規模炭田の開発が盛んになったため、中

藩政時代の主要交通路

「日本地誌」より



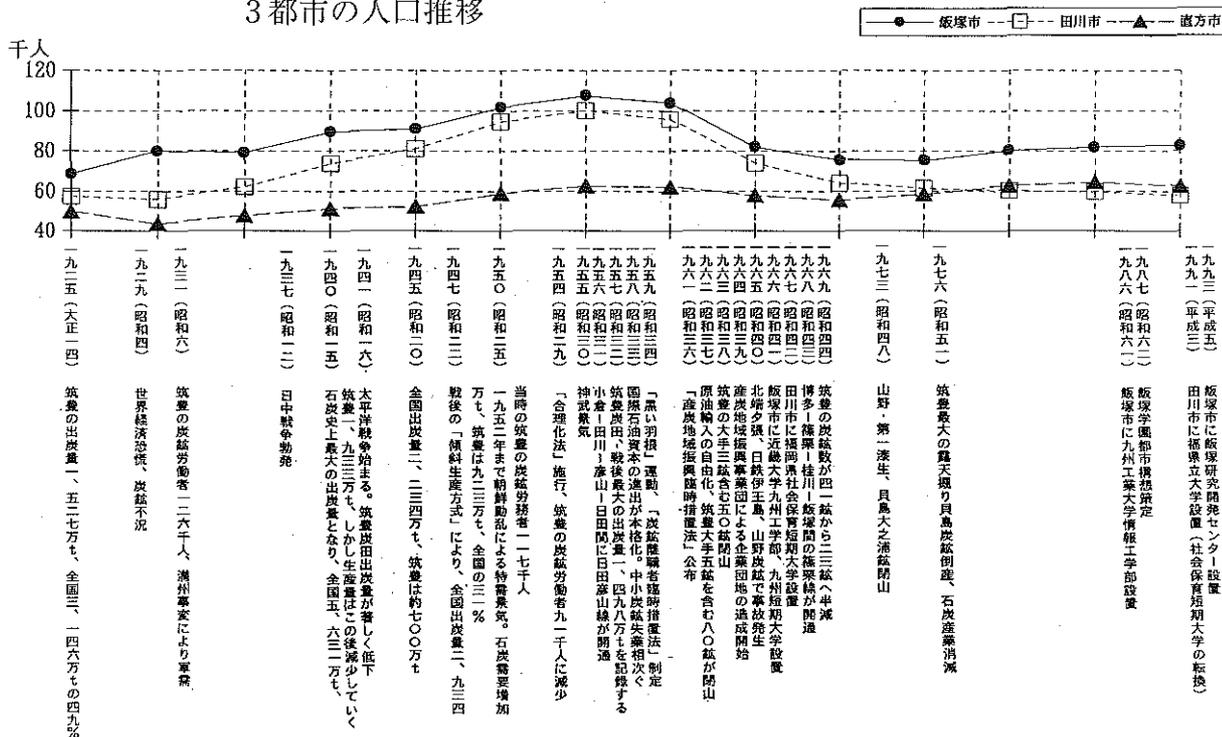
小炭鉱の多い筑豊の炭鉱は、生産の合理化などによってしのいでいたようである。

そして第二次大戦による若年労働力の不足などにより、出炭量は減少を続け、戦後の「傾斜生産方式」などによる成長は実現されたものの、筑豊の炭鉱労働者は減少の一途をたどり、1973年（昭和47）の貝島大之浦炭鉱の倒産まで一貫して減少を続けていくことになる。

〈飯塚、田川、直方の3都市の盛衰〉

第一次大戦当時、1921年（大正10）の筑豊の炭鉱鉱夫数は約113千人といわれ、当時の筑豊地域の人口487千人（1925年）の23%を占めており、仮にこの人口の半分が何らかの仕事をしていたとすると、就業人口の半分近くが鉱夫となり、これ以外に炭鉱に関わる労働者を加えると、大半の人々が石炭で生きていたことになる。しかしこれ以降は、大戦による労働者の減少を経て、増減を繰り返し、戦後の1950年

3都市の人口推移



(昭和25)は117千人、1954年(昭和39)は91千人、そして1970年代には皆無となっていく。

このような産業の盛衰を繰り返す中、中心となった飯塚、直方、田川の3都市はどういう役割を果たしたのであろうか。

この3都市は、同じ筑豊地域にあるものの、筑前国の城下町であった直方、長崎街道の筑前六宿の一つの飯塚、そして両都市とは起源を異にする田川の3つ

の都市が中心となっている。筑豊地域には、市制を敷いているものはもう一つ山田市があるが、今回はここでは言及しない。

直方市は、遠賀川とその支流の彦山川の合流する地点にあり、石炭の河川輸送時代から賑わったところである。また、筑豊に最初に鉄道が敷かれたのもこの直方であり、北九州とのつながりが深い地域であった。元々城下町でもあったため、卸売業を始め

とした都市機能の集積が進み、石炭の機械による採炭のための機械製造、修理業などの立地が進んだ地域である。1990年（平成2）現在の人口は約63千人、1970年（昭和45）以来増加していたが、1985-90の間に若干減少へ転じた。近年は、北九州・黒崎へ通勤する人も多い。

飯塚市は、筑前六宿の宿場町としての賑わいをもち、南部の嘉麻と穂波の両郡（現在の嘉穂郡）の石炭や農産物の集散を背景として成長した都市であり、商業都市としての性格を有し、これに従事する人々も多く、周辺地域からの通勤流入も多い。1990年の人口は83千人で、1975年を底にして人口は回復してきている。3都市の中では一貫して人口規模の大きかった都市である。

田川市は、両都市とは異なる起源を持ち、1900年（明治33）に三井鉱山が進出して以来成長した都市であり、1943年（昭和18）に伊田町と後藤寺町の両町が合併してできた都市である。この両町は、三井の炭鉱を中心として成立した町であり、田川市は、純粋な炭鉱都市であった。それ故に、石炭とともに人口は推移し、ピーク時の1955年（昭和30）には、100千人あったものが、1990年には、約58千人にまで減少しており、現在もまだその傾向が続いている。

〈石炭からの転換に向けて〉

このように筑豊地域における3都市の成長はいずれも石炭に依るところが大きかったことは明らかである。しかし石炭産業の消滅後、都市の活力維持を支えてきたのは、何であろうか。

直方市の人口の動きを見ると、経済的には石炭への依存はしていても、人口に関してはあまり大きな影響は出ていないと言える。石炭の町と言うよりは、北九州への近接性から形成されてきたベッドタウン

都市から次への転換が必要な時が来ている。田川市と飯塚市は、1960-70年のこの10年間の炭鉱閉山に伴う人口流出は同じだったものの、この後、飯塚市の方は回復基調に転換するのに対して、田川市は依然とその傾向が続いているという点である。これらの異なる動きをさらに男子の定着率という点からみてみる。

次の3つの表は、よかネットNO.7にも同様なものを掲載したことがあり、御記憶の方もおられると思う。ある年代に生まれた人が、中学・高校ぐらゐまでどのくらいその地域に住み、大学や就職によってどのくらい流出し、そしてUターンするか、というようなことをみたものである。つまり、ある地域に人が住み、仕事をし、生活を維持していくために、各年代がある一定の持ち場を持っているはずであり、それが地域の産業の維持に不可欠なものとなる。

〈大学卒業後の定着が求められる飯塚市〉

まず飯塚市を見ていただきたい。人口がピークだった昭和30年から昭和35年の10-14才の人口は5,500人から7,000人へと増えている。しかし高校を卒業するまでいた人は、20-24才になる時点で37%、47%しか残らず、ここで生まれた人の半分以上は昭和40年代に残っていない。しかし、昭和50年には20-24才の定着率は63%に上昇、昭和55年78%、昭和60年85%、平成2年113%と100%を越えてしまう。この間の施策をみると、昭和41年に近畿大学工学部の設置、昭和61年九州工業大学情報工学部の設置を行い、若者の定着、流入を実現した。その結果が数値に表れている。

〈Uターンの減少対策が必要な直方市〉

直方市は、北九州への近接性によって、ベッドタウン的な性格を持ち始めていたことは先に述べたが、

飯塚市 男子定着率

単位：人、%

	昭和 16~20年生 S30年	昭和 21~25年生 S35年	昭和 26~30年生 S40年	昭和 31~35年生 S45年	昭和 36~40年生 S50年	昭和 41~45年生 S55年	昭和 46~50年生 S60年	昭和 51~55年生 H2年
10~14歳	5,505 100%	7,090 100%	4,885 100%	3,171 100%	2,656 100%	2,555 100%	3,208 100%	3,124 100%
15~19歳	4,504 82%	4,589 65%	3,706 76%	2,827 89%	2,763 104%	2,709 106%	3,611 113%	
20~24歳	2,031 37%	3,316 47%	3,068 63%	2,489 78%	2,249 85%	3,018 118%		
25~29歳	2,195 40%	3,257 46%	3,145 64%	2,402 76%	2,066 78%			
30~34歳	2,369 43%	3,573 50%	3,146 64%	2,421 76%				
35~39歳	2,539 46%	3,621 51%	3,198 65%					
40~44歳	2,515 46%	3,559 50%						
45~49歳	2,371 43%							

直方市 男子定着率

単位：人、%

	昭和 16~20年生 S30年	昭和 21~25年生 S35年	昭和 26~30年生 S40年	昭和 31~35年生 S45年	昭和 36~40年生 S50年	昭和 41~45年生 S55年	昭和 46~50年生 S60年	昭和 51~55年生 H2年
10~14歳	3,310 100%	3,889 100%	3,165 100%	2,363 100%	2,241 100%	2,399 100%	2,583 100%	2,318 100%
15~19歳	3,050 92%	3,092 80%	2,414 76%	2,086 88%	2,167 97%	2,260 94%	2,460 95%	
20~24歳	1,740 53%	2,074 53%	1,792 57%	1,670 71%	1,527 68%	1,458 61%		
25~29歳	1,742 53%	2,235 57%	2,090 66%	1,844 78%	1,457 65%			
30~34歳	1,911 58%	2,537 65%	2,247 71%	1,757 74%				
35~39歳	2,094 63%	2,589 67%	2,131 67%					
40~44歳	2,092 63%	2,499 64%						
45~49歳	2,019 61%							

田川市 男子定着率

単位：人、%

	昭和 16~20年生 S30年	昭和 21~25年生 S35年	昭和 26~30年生 S40年	昭和 31~35年生 S45年	昭和 36~40年生 S50年	昭和 41~45年生 S55年	昭和 46~50年生 S60年	昭和 51~55年生 H2年
10~14歳	5,516 100%	6,808 100%	4,311 100%	2,721 100%	2,020 100%	1,963 100%	2,151 100%	1,954 100%
15~19歳	3,929 71%	3,863 57%	2,669 62%	2,108 77%	1,606 80%	1,722 88%	1,839 85%	
20~24歳	1,845 33%	2,170 32%	1,752 41%	1,459 54%	1,164 58%	1,186 60%		
25~29歳	1,792 32%	2,358 35%	2,047 47%	1,685 62%	1,245 62%			
30~34歳	1,785 32%	2,426 36%	2,045 47%	1,588 58%				
35~39歳	1,804 33%	2,430 36%	1,987 46%					
40~44歳	1,769 32%	2,314 34%						
45~49歳	1,716 31%							

資料：国勢調査

それは昭和30年までに生まれた人達が、年をとるにつれて確実に増えていったことによるものである。昭和30年生まれまでの人達の縦軸を見ていただくと、20-24才になった時点で50%台の残存率にまで落ちるものの、以後は徐々にこの比率が上昇している。しかし、昭和31-35年生まれの人々が、30-34才になる時点で78%から74%へ4ポイント低下している。ちょうど結婚などによって新しい住宅を求める時期でもあり、若年向けの住宅不足や都市サービス機能の不足が原因として考えられる。

〈若者定着、Uターン施策が求められる田川市〉

田川市の場合、飯塚、直方の両都市が持っている都市機能、交通条件に比較して相対的に充足度が低いのではないかとこの点が挙げられる。それは、都市の成長過程において、飯塚市や直方市への依存により、高次の都市サービス機能が充実されなかったということ、さらに元々は二つの町であり、両方の機能充実にまでは至らなかったということが考えられる。

〈福岡、北九州、そして筑豊〉

筑豊圏域は、3つの中心都市があるものの、全体の中心と呼べるものがなく、そのため筑豊はバラバラという印象がある。しかし、それぞれが成長してきた経緯、そのために現在持っている特性、これらの個性を発揮する方向で今後の発展が期待される。飯塚市は、大学の立地をテコにして、学園都市づくりから学術研究都市への発展が期待され、田川市は福祉を専門とした県立大学の設立を契機に、学園都市だけでなく福祉の町としての個性を生かす方向が期待され、直方市は、大集積ではないものの機械産業を核として、北九州地域の産業高度化における一定の役割を持つ都市としての発展が期待される。このまま福岡や北九州への依存を強めていくのではなく、

かつては九州の表通りと言われていた地域が、もう一度その地位を獲得する努力を期待したい。

(山辺真一)

----- アジアス九州シンポジウム -----

佐賀は何の首都を目指していくのか？

21世紀に向けた新しいまちづくりへの提言

去る8月17日(木)、佐賀市の主催で「佐賀市21世紀に向けた新しいまちづくりを目指して」と題したシンポジウムが開かれました。当日は会場に150席を設置していましたが、予想以上に参加者が多く、最終的には200人以上がホールに詰め駆け、立ち見の人のための臨時の椅子を出すほどでした。

〈産学官が着実に成果を得ることを目指して〉

最初の基調講演は、高橋良平九州北部学術研究都市整備構想推進会議会長による「九州北部学術研究都市の目指すもの」というテーマでした。

佐賀市は、九州北部学術研究都市における拠点の一つですが、一般市民や産学官の関係者に対するPRは今回が初めて。このため、一般の人にも分かりやすいよう、構想の目的や役割について、詳しく説明していただきました。

特に、構想の基本的方針である「環境・人間・アジア」の3本柱については、産学官がそれぞれ成果を得られるように研究開発やプロジェクトへ取り組み、成果を着実に進めて、長期的にアジア諸国の研究者とのネットワーク交流、人的交流の形成を図っていくことを目指すのが望ましいという考えを改めて示されました。さらに、ネットワーク化が著しい今日において、21世紀の人間指向型社会にふさわしい地



基調講演を行う高橋良平会長

域づくりが重要であるという意見を述べられました。

〈佐賀は何の首都を目指す？〉

続いて、猪股純佐賀市助役と当事務所糸乗による基調報告が行われました。

猪股助役からは、平成4年度から進めてきた佐賀地域の学研都市調査の報告として、佐賀における学術研究テーマや支援機能、ハード面の整備、の3点について説明されました。

学術研究テーマとしては、低平地研究、共生環境研究、健康科学など、地域特性を生かすテーマの紹介がなされました。

また、糸乗は、つくば市や関西文化学術研究都市などをもとに、我が国におけるこれまでの学術研究都市づくりがどのようにして進められてきたかの説明を行いました。

基調報告のまとめとして、佐賀の今後のあり方については2つの点の指摘がありました。

○「佐賀は低平地研究でも健康科学でも何でもいから何らかの首都を目指していくべき」

○「これまでの人材送り出し専門の地域から、人材を



いろいろな意見が出たパネルディスカッション

取り込む地域に脱却するべき」

将来に向けて、佐賀は何の首都を目指していくのでしょうか。今後の大きなテーマだと思います。

〈産学官6人集まって文殊の知恵？〉

最後は、パネルディスカッションが行われ、伊藤榮彦佐賀大学理工学部名誉教授、野口和子佐賀女子短期大学教授、中村敏郎(株)中村電機製作所代表取締役社長、吉田久良佐賀県工業技術センター所長、西村正俊佐賀市長の5名によるパネルディスカッションが行われ、コーディネーターは荒巻軍治佐賀大学理工学部教授でした。

以下に、各先生方の学術研究都市構想への思いをまとめてみました。

○高齢者の就業の場として、地元の技術者などで退職した人の人的ネットワークの構築を進めてみてはどうか。

○高齢者の社会参加を支援するためのテクノロジー(手足の力や視力の衰えをカバーする機器の開発など、センサー技術、制御工学、医学、心理学を統合した最先端技術)は、地場でも十分に展開でき

るだろう。

- 食が外部化（調理食や外食で食事をまかなうこと）している近年は、商品食品の人間の健康に対する責任が重要である。佐賀でとれる食べ物は大変美味しく、1年を通じて旬が楽しめる。今後は人間の健康増進に貢献できるような、食品の開発などを進めていってはどうか。
- 佐賀のような低平地は世界に沢山ある。佐賀の平地に関する技術集積を世界中のあちこちに生かせば、ローカルなテーマでもインターナショナルなテーマに展開できる。
- 佐賀には理工系学部の大学があるが、これまで、こうした学生を地域に取り込むことができなかった。今後は地場の企業が情報を発信して企業の魅力を学生に伝えていく必要がある。
- 産学の結び付きを行政が間に入って支援していくことが重要になる。
- 地域づくりをキーとして、地方分権ならぬ地方主権を実現したい。

この他にもいろいろな話が出て、今回のシンポジウムのテーマの通り、産学官から集まった3人によって、文殊の知恵の芽が息吹はじめたような気がしました。また、佐賀の特性をみると、面白そうなテーマが多く、意外に多様な地域だなと感じました。

（尾崎正利）

※今回のシンポジウムについて、記録をまとめた報告書が出来上がりますので、ご希望の方は当社までご連絡下さい。

SAS全国大会 in 九州

風のふくおか、スースーはかた、
ここはあなたにとととと

「SAS」とはシステムズ・アナリスト・ソサエティのいう一見かたぐるしいネーミングはあるが、会則なし、入会・脱退は個人の自由意志という、極めてええ加減なグループである。かごんま（鹿児島）弁でいうなら「てげてげ」という言葉が適切かもしれないが……。

この会は当時通産省に在籍されていた平松守彦氏らが中心となって、昭和46年に設立したと聞いている。現在、北海道から九州、海外まで入れて14の支部があり、1995年名簿によると会員数約1,000人となっている。

発足以来、このようなええ加減なグループが20数年継続して活動を持続しているとは驚きであるが、ええ加減であったから続いてきたとも言える。また、この会では毎年全国大会を各支部毎に持ち回りで実施している。今年度は九州担当ということもあって今年の春頃から準備を進め、去る8月18～20日にシーホークホテル&リゾートを拠点として実施した。私も実行部隊の補助役として手伝い、全国のSAS会員のみなさんに大会のテーマである「アジアと九州の関わり」について、多少なりとも理解していただけたと思う。

〈異業種ではなく、異人の集まり〉

全国大会には毎年100名程度の方が参加されるが、年齢も職業も実に多種多彩であり、なかには一言意見を言うとはね返ってくるような方もいた。午前中は「アジアの中の九州」をメインテーマとして、

九州国際大学の林一信先生、中村学園大学の権藤興志夫先生の講演を行い、昼からは5つのグループに分かれて研修会を実施した。この研修会の各グループの発表の時に、ある方が「SASは異業種交流ではなく、異人の集まりではないか」という発言をされたが、私はそれに妙に共感した。なぜなら、私自身も、異業種間の情報交換や交流をしているつもりはなく、ただ人と人とのつきあいを楽しみたいといった気持ちの方が強いような気がするからである。また、定例会に来ている人をも、商売抜きで交流好き、ええ加減に参加しているといった異人あるいは異人に近い人の方が長く続いているように見受けられる。

〈白熱した夜なべ談義〉

8月18日の公式のイベントが終了し、2次会は和室を借り切って、全国から持ち込まれたうまい物を囲んでの夜なべ談義となった。

この2次会では、はじめ数名毎のグループで輪を作って酒を飲み交わしながら議論をしていたが、突然誰かが立ち上がり、「今後のSASのあり方はどうすべきであるのか、もっと発信しないといけないのではないか、社会に貢献すべきこともあるのではないか」といった問題提起がされ、それを皮切りに次から次に意見が出された。これは、SAS全体にとってとても有意義な意見交換であったと思うとともに、私にとっても、改めてSASについて考えさせられた一時であった。

その結果何となくみんなが納得した意見としては、「年に一度集まって議論をする以外に、パソコン通信などを使った日常的な会員間の情報発信や交換を行う必要がある」、また「日常的な情報発信の中から共鳴する人々がグループを創り、アクティブな活動をしていくことも考えられるのではないか」というこ

とであった。

白熱した空気の中で、私もなんとか午前2時頃まで濃密な時間を過ごすことができた。

(山田龍雄)

韓国の人たちとの交流で“近くて遠い国” との距離がずっと近づいた

— SASの12人で行ったパーソナル交流体験記 —

〈交流の話し合いは始めから緊張したテーマで始まってしまった〉

「あなた方は従軍慰安婦の問題をどう思っているのですか」という言葉は、深刻な感じでいわれたわけではない。「やっぱり聞いてみたい」という気持ちを抑えかねて、つい出てしまったという雰囲気であった。しかし一瞬私は息が詰まった。それは日韓草の根交流会とでもいう場で、会話が始まった早々に出てきたのである。

実のところ、“交流の対話”をすることになっていることは分かっていたが、「慰安婦問題もあるので、政治的な問題は避けよう」という申し合わせが回ってきていた。今後率直な交流が少しでも長く、深くなっていくことを願う私としても、その配慮に異存のあるはずもなかった。しかし、せめて、韓国国立中央博物館（旧朝鮮総督府）の取扱い問題ぐらひは、議論できないかなといった気分はもっていた。

ところが、のっけから、最もシビアな“慰安婦問題”が始まってしまった。

今回の釜山への旅の楽しみは、2泊3日とはいえ、①博多港から船で行くということと、②福岡の久保さんの友人の姜（カン）さんのお世話で、観光で上

面を撫でるようなことではない交流のふたつが期待されていた。その中に禅寺での精進料理をいただくことや、伝統の舞踊の鑑賞、韓国の人たちとの交流があることになっていた。あるとはいっても、一般の観光旅行のようにそれぞれの中味が想像できるはずもなく、その“わからなさ”が、我々一行の楽しさを増幅していたのでもあった。

期待の第一段をなしていた対話交流は、スタートから厳しいものとなった。

〈臆せず、率直に本音で語り合おうと考えた〉

対話は韓国側6人、日本側6~7人（まだ夕食から帰ってきていない人がいた。最後には12人）で始まった。全員の自己紹介の後、姜さんは「伝統文化について議論しよう」と話し始めたが、1~2人話しているうちに、「(日本の) 皆さんは従軍慰安婦の問題をどう思っているのですか」という質問が出た。率直な対話であれば、一番気になっていることを素直に語るということが、本来当然のことである。我々日本側の“申し合わせ”の甘さとやましさを痛感した。

色々な意見が出た。正確ではないが、私の憶えている感じをあげてみる。

- ・民間ベースではなく、日本政府が対処すべきではないか。(韓)
- ・日本の政府レベルでやるべきと思う。(日)
- ・韓国政府も日本政府と同じ立場をとっているのではないか。(日)
- ・慰安婦は韓国人だけでなく、日本人の農村からもたくさん出ていった。(日)
- ・日本人に対するより、韓国女性に対する方がひどかった。(日)
- ・日本は独自の文化がない。文字も技術も自前のもの

のは全くなく、模倣である。韓国は素晴らしいが日本はダメだ。(日)

- ・今のままいくと日本はアジアで嫌われものになってしまうのではないか。(韓)
- ・韓国は男女平等で、姓も別姓となっているが、日本は差別が強く、今、別姓が議論されている。(韓)
- ・韓国の男女別姓は男系中心の社会で、女性がその中へ入れてもらえないからではないのか。(日)
- ・私の友人には、李ラインによって漁船がだ捕され、家族で暮らしにも困り、今でもそのことが忘れられないといっている人もいる。(日)

交流会は、総じて率直に話が進んだ。特に韓国側の主宰者である姜さん、2人の軍人の方（1人は大尉だときいた）は冷静で、学識の豊かさがうかがわれた（丸山真男の本を言及されて驚いた）。

しかし、少しではあるが、日本人の中にもあるひとつの性癖が表れていたように思う。それは、時流とかその場の雰囲気に合わせて意見を出してしまいやすい性癖である。この時も、「日本が悪い、韓国の方が偉い」という態度で、できるだけ平穏にといった感じもあった。私はこのような場では、状況にもよるが、できるだけ相手側の聞きにくいことを率直に話す方が礼儀になっていると思う。慰安婦問題について調べたわけでもないのに、それほど発言権があるわけでもないが、「慰安婦は韓国人だけでなく、もとは日本人だった」ということは言うておくべきだと思った。

〈植民地支配という問題〉

単に「ひどいことをした」とか「女性蔑視である」というような人道上の問題ではない。「韓国人慰安婦に対しては、日本人に対する以上にひどい扱いをした」といわれているが、これは植民地支配というこ

とから、当然出てくることである。植民地の人権を本国より重視するような帝国主義国というものはない。もし仮に、人権や経済条件などで植民地側が優遇されるということがあれば、それはもはや「植民地支配」とはいわないのである。

日露戦争まで、誠実で行儀よく、思いやりもある「武士道精神」をもった国として尊敬されていた日本が、なぜ弱いもの苛めや時流迎合をこととする変な国に変わってしまったのか、日本人として十分検証しておかねばならないと思う。

ついでに言えば、京城で旧朝鮮総督府の建物を見たときに、うんざりしたことを思い出す。せめて、植民地支配をするなら（誤解されやすい言い方であるが）、もっと日本文化や建築様式の押しつけをすればよいとさえ思ってしまった。当時の日本が、かの国の人々が最も大切に思っていた場所に、大事にしていた光化門を取り除くまでして建てた総督府は、単に重々しい尊大さ以外には「俺の方が欧米のコピーの仕方はうまいぞ」といった程度の建物でしかない。全く情けない限りだと思った。そもそも日本は植民地を持つこと自体間違っていたのである。しかし、この事については話し合われていない。

〈特攻隊のこと〉

日韓交流会は通訳の時間もあるので、いろいろなことを思い出させてくれた。そのひとつが、前記の旧朝鮮総督府の問題で、もうひとつが太平洋戦争末期の特攻隊のことである。

数年前、ある会のエクスカージョンで、鹿児島県の知覧町を訪れた。ここは沖縄への特攻隊発進基地のあったところで、記念館があって、多くの資料が展示されている。大勢の集団行動であったので、ほとんど通りすぎたといっていっくらの時間であっ

たが、資料の中に特攻隊の発進基地が日本からだけでなかったことが出ていた。

このことがずっと気になっていた。つまり、「台湾や韓国の若者も特攻隊にかり出されていたのではないか」という疑いについてである。今年の夏やっと再訪して確かめることができた。

結論から言うと、知覧町で確かめたことは、①発進基地は鹿児島と台湾で、飛び立った空港はたくさんある。②知覧町で発進させるために特攻隊が各地で編成されたのだが、それには日本の内地（関東方面）だけでなく、朝鮮（連浦、平壤）や満州（中国の東北）などが含まれていた。気になって「台湾や朝鮮の若者も特攻隊員になっていたのではないか」と質問してみたが、「特攻隊として沖縄へ向けて（アメリカ軍目懸けて）突撃していったのは日本人（内地人）だけだった」という説明であった。このことについては、もっと調べてみる必要があると思ったが、仮に特攻隊に採用されなかったからといって、民主的植民地支配だったということではなかろう。逆に心配のあまり、差別したということかもしれない。この事についても交流会で対話していない。

今まで、日本と韓国や中国について考えたいことがいろいろ思い出される対話交流会であった。こんな機会を与えていただいたことに感謝している。

〈韓国の禅宗の精進料理と茶会〉

難しいことばかり書き続けてきたが、今回の旅には姜さんとそのグループの人たちによって、極めて楽しい時間が用意されていた。そのひとつが三大名刹のひとつである通度寺の塔頭における精進料理と茶会である。

現在の日本の精進料理は「食事をいただくこと自体が精進である」という思想が消えてしまっていて、

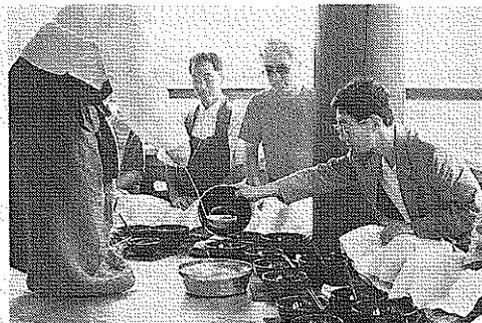


昼の精進料理：菜葉をまいたオニギリ、もやしの吸物、つけもの（終わりに全部洗う）

単に材料に肉や魚が使っていないという精進材料料理になってしまっているが、ここでいただいた料理は精進そのものであった。以前京都の禅寺で一晩のおつとめをし、朝早く起きて廊下の拭き掃除をし、坐禅・読経をしたあとでいただいた朝食は、精進をする食事であった。しかし、泗漢庵でいただいた料理は更に念が入っていた。

まず、全員清水で手を洗い清めて、六角のお堂に上がって坐禅を組み、用意されていた白布につつまれた四つの椀を揃えて、それに精進料理を取り分ける。それを静かにいただき、食べ終わると鍋を洗った湯をひとつの椀にもらって、それぞれの椀を洗い、最後にそれを飲む。次に今度は水を椀にうけて、それで手、椀などを洗い（水は大きい器に戻す）、きれいに拭いて元通りに包みなおして精進が終わるのである。

この会食の後、私達は通度寺のあたりを廻っていたが、その間に再び姜さんたちは茶会の用意をしてくれていた。茶は香ばしい焙じ茶のようであった。日本の茶会は抹茶で行われているが、「ひょっとすると元は目の前に見るようなものだったのかもしれない」と思ったりしていた。作法は全く韓国流の立て膝である。私たちも茶をいただき濃密な時間は過ぎた。



作法通りに精進料理をいただく

〈古典舞踊・サルプリを見る〉

これには姜さんの骨折りによるいろんないきさつがあったに違いない。とにかく、なぜ私たちがこれほどまでに親しく韓国の文化に触れさせていただいたのかよく解らないが、すばらしい舞であった。舞って見せてくれたのは呉さんという方で、智里山（韓国の霊山）の麓から8時間もかけて（交通事情も悪かったようだ）我々のために来ていただいたのであった。舞の始まる前に、私は「写真を撮ってもよいか」と尋ねた。「ストロボはダメでしょう」、「いいんじゃないですか」ということにはなったが、できるだけストロボ抜きで写そうと思った。表紙に写してあるのは、その写真である。この舞についての解説は避けるが、この写真は私がシャッターチャンス伺いながら、ゆっくり撮ったものである。その時、私を感じたことを想像していただきたい。

〈韓国と日本の文化の違い〉

まだ沢山の印象がある。たった48時間しかいなかった韓国で、これだけの濃密な印象を与えていただいた姜さんには感謝の方法が思いつかない。たくさん印象のひとつが通度寺の勤行である。私は臨済宗大徳寺派の寺の檀家で育ったので、雰囲気は似て



昼食後は茶会に招かれ、お茶をいれていただく

韓国版“喫茶店”にはいって

素花房

茶	
일 차 (綠香茶)	700
대차 (大茶)	900
세차 (細茶)	900
가 무 차 (桂茶)	900
자스민차 (茉莉花茶)	700
현미차 (玄米茶)	700

代用茶

연 차 (蓮茶)	800
(명)송차 (梅子)	800
(명)세차 (桂夜)	700
구기차 (枸杞子)	700
솔 무 (蘿蔔)	700
천공 (川芎)	700
냉백단향 (冷白檀香)	700

부산시중구영복동 2가32의 3 전화 23-8818

喫茶店の“メニュー”、日本のものとは少々趣が異なっている

いるなと思うと同時に、ひょっとしたらこんな風が本来の形かなとも思った。もう一度ぜひと思うのは、この寺の夕方の勤行とサルプリである。通度寺の勤行は夕方6時半に行けば毎日やっているということなので、行けば出会えるということではある。

文化ということでは、私は韓国と日本は相当違うと思ってきている。通度寺までの一連の時間の経過の中で、逆に、仏教という面で見れば、意外にも近いのかなと感じたぐらいである。同行した人の中にも、「日本の文化はもともと中国、韓国から流れてきたものであって、そのコピーである」というようなことをいう人もいた。私は「そうではない」と思っていた。

茶会の後で、高名な韓国の陶芸家の窯を訪ねた。そこで井戸茶碗を見ながら、柳宗悦の「喜左衛門井戸を見る」という文章を思い出していた。宗悦の見方は、美は人工で造るだけでなく、自然の力、あるいは日常の中で使われているような、自然の営みの中で、一層醸し出されていくものだというような態度である。これについては要約をしかねるのでぜひ原

文を読んでいただきたい。(「柳宗悦民藝紀行」岩波文庫版)

一言だけつけ加えると、井戸茶碗などというものは百姓がドロクを飲んだり、飯茶碗として使っていたもので、その結果できあがった「美しさ」を日本では大きく評価するが、中国や朝鮮陶磁はそうではなかった。日本人は神道の影響なのか、あるいは神道さえも古来の日本人の影響で形成されたというべきなのか、“じねん”の力を大切にしたいと考えているように思う。

文化ということでは、最もやりきれない思いをしているのは、韓国国立中央博物館として使われていた旧朝鮮総督府の建物である。これは韓国の美しい建物を毀した上で、あたかも「欧米のコピーなら我々の方が上手だぞ」とふんぞり返っているような感じしか与えない。日本人として恥ずかしい限りだ(これについては別に柳宗悦にふれて書いた文章があるので掲載したい)。

それと比べると、姜さんの喫茶店はよかった。申し訳ないことではあるが、「姜さんが喫茶店をやっ

おられるので、そこで少し休ませていただこうか」といわれたとき、ついつい日本人のインテリアが作りそうな欧米スタイルの喫茶店を考えてしまった。ところが、韓国の茶を飲むところであったし、その茶もうまかった。

まだまだ書きたいことはあるが、今回お世話いただいた方々に感謝しながら筆をおく。

〈追記〉「空のかなたに・特攻おばさんの回想」という本が、福岡の葦書房から出ていて、その冒頭に朝鮮半島出身の特攻隊員のことがでている。光山文博小尉（本名卓庚鉉）である。この本に出身地の内訳の中で、朝鮮11名、台湾1名が記載されている。私の平和記念館で聞いた話と食い違っている。（糸乗貞喜）

統計からは見えない家族のあり方・住まい方
「ネットワーク居住の含意と住宅研究の方向」

東北大学教授 近江 隆先生

10月6日、東北大学工学部建築学科の近江隆先生をお迎えし「ネットワーク居住の含意と住宅研究の方向」と題した勉強会を行いました。

先生は、農村集落に始まり、構造学、生活科学、マンション問題まで幅広く研究をされています。

お話の内容は、先生の考え方の源流がアーサー・ケストラーの“ホロン”にあるということから始まり、ネットワーク居住とは何か、マンションの賃貸化問題と多岐にわたり非常に興味深いものでした。

その中でも特に印象に残った話をいくつかご紹介します。

〈マンションとは？〉

・マンションは建物の中に建物を入れたもので、独立した住宅を接合した宙に浮かぶ住宅のようだが、それを支えているのは躯体や廊下、階段などの共用部分である。（そう考えると居住者が個人的に所有しているのは空気だけともいえる。）

・既存の住宅統計調査だけでは読み取れない部分が多い、実際マンションの数を正確に捉えることは難しく、賃貸化された物件がどれだけあるかはまず分からない。（住宅統計調査において分譲マンションは「共同建て・持家」としか把握できず、賃貸化した場合は「民借・共同建て」などに編入される）

・これからは公営住宅の供給は必要ないのではないが、仙台ではマンションの5割が賃貸化しており、民間賃貸がリードしている。これを公的に借り上げ活用してはどうか。

〈ネットワーク居住とは……〉

・単に、自らが居住する住宅だけがその人にとっての住まいではなく、個人が生活を営む中で、血縁、地縁を含んで家族という概念に対する住宅のあり方を考える必要がある。それは、単身者にとってはいつも食事の面倒を見てくれる近所の叔母の家であったり、夫婦のみの世帯にとっては、毎日世話をしに行く祖母の家であったり、またその逆もある。つまりネットワーク居住によって様々な役割、機能が代替されている。

・今日の家族の多くは、地域的に構成員が散在して暮らしている。1つの住宅の中は世帯という社会的な区切りがあるだけで、分散居住している見えないネットワークとしての家族が存在する。

・もし住宅が家族の要求を充たす生活空間としての器であるとすれば、住宅は見えない家族のネット

ワークによって結び付けられた複数の住宅の使い分けを含むネットワーク居住の器としての存在が求められる。

- ・多くの家族が3~4つの住宅を使っているとしたら、従来の1住宅の完全性を追究してきた計画論や政策論は、このような事態に有効に機能するとは思えない。
- ・大都市の1/3以上を占める単身者、高齢化の進行、様々な非血縁を含む居住単位の生成、親族多世帯集住等の現代の居住世界を理解する有効な概念として今後はネットワーク居住を考えてみなければならぬ。(金川 薫)

「しじみ定食」に「しじみドリンク」!?

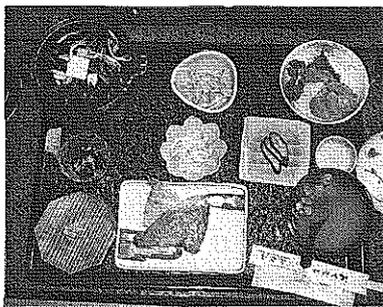
青森県市浦村しじみの特産品づくり視察

福岡県田川郡に彦山川が流れる大任町というところがある。その彦山川には「ましじみ」という種類のしじみがあり、町では「しじみの里づくり」としてまちおこしをやらおうとしている。既に毎年「しじみまつり」や「しじみマラソン」などの行事を行っているが、今度はしじみを使った特産品づくりなどを考えているところである。

しじみの産地といえば宍道湖や琵琶湖が有名だが、今回はしじみを使った特産品づくりを行っている青森県市浦村を視察することにした(もちろん宍道湖や琵琶湖にもしじみの特産品はある)。

市浦村は津軽半島の日本海側にあり、十三湖という大きな湖を有している。この十三湖でしじみがとれるのである。

〈函館経由で青森へ〉



しじみで満腹
“しじみ定食”

9月7日(木)、大任町しじみの里づくり企業化推進研究会の人たちと共に、福岡空港からまずは函館空港へ飛んだ。函館で毛ガニやタラバガニを物色したあと、JRに乗って青函トンネルをくぐり青森市内へ。福岡-青森間の空路は今年から就航しているのだが、曜日が限られていて日程が合わないなどの理由により函館経由の行程をとった。その日は青森泊で次の日(9月8日)に市浦村へ向かった。

市浦村は人口3千人強、面積111.7km²、そのうち十三湖は18.06km²で村面積の16%を占めている。十三湖のしじみの年間漁獲量は約2,000tで全国5位である。しじみは長い間、生での出荷だけであったが、村では平成元年からしじみの加工に着手しており、現在「しじみ味噌」や「佃煮」「しじみエキス」などを作っている。

しじみの話をしておくと、しじみは大きく分けて真水と海水が混じり合う汽水湖にいるものと、河川の中流域など真水で生息するものがある。宍道湖や十三湖でとれるものはヤマトシジミといい汽水湖に生息、大任町のものはマシジミといい真水に生息している。琵琶湖のものはセタシジミといいまた種類が違らしい。我々が普段よく食べているのは、黒い色をしたヤマトシジミである。

〈しじみで満腹〉

市浦村では、まずしじみ料理を食べさせてくれるという店に行った。しじみ定食2千円という値段だったが、どんぶりに入ったしじみ汁、しじみの和え物、しじみのバター焼き、刺身（これにはしじみは入っていない）など、といった盛り合わせだった。みんなで数えてみると、1人前のしじみ汁には殻付きしじみが約40個、バター焼きの方にはひとまわり大きな殻付きのしじみが27個前後入っていた。それだけの量でありながら飽きることもなく、何よりもしじみで満腹になったというのはそうそうないだろうと思った。

〈しじみを使った健康ドリンク〉

そのあと、村役場を訪問して経済観光課長の話を聞き、それから村内のしじみ加工所等を案内してもらった。

まず市浦村農林水産物加工流通組合「トーサム」。ここでは栄養ドリンクのようなものとして「しじみエキス21」、エキスの粉を錠剤やカプセルにした「貝活源ヤマト」などを加工している。「しじみエキス21」は、以前飲んでみたときはやや生臭さがあったが、今回味に改良が加えられ、生臭さはなく甘く飲みやすいドリンクとなっていた。1本100mlを250円で出しており、今年の4月～8月までで7万5千本を販売している。リピーターも多いらしい。

しじみは肝臓の働きを活発にし、昔から黄疸に効くといわれるなど、健康食品としても考えられている。このことがドリンク剤や錠剤などの開発につながっている。ちなみにしじみドリンクの発案者は今の村長なのだそうだ。

〈“即席しじみ汁の素”もある〉

次に訪ねた農水産加工センターでは、しじみの殻

と身ははずす機械があった。筒状の網の中に茹でたしじみを入れ、ぐるぐる回していると殻と身がはずれ、身だけが下に落ちるといった仕掛け。大任町ではこの身をはがす作業が大変だといっていたが、これなら簡単で早い。ただし返りはかなり生臭い。

ここでは「しじみエキス味噌」などを作っているが、これはスプーン1杯分をお湯で溶かすと即席しじみ汁も出来る。ご飯にのせてもおいしいそうだ。最後に漁協の方の話を聞いたが、これがかんりの津軽弁で、九州の私たちには時々単語が聞き取れるくらいで、申し訳ないけれど内容的には雰囲気以外ほとんどわからなかった。いや、でも方言は大切にしたいものだ。

大任町との大きな違いは何といってもしじみの量だが、それだけに商品づくりにはアイデアが要求される。しじみの活用法からまちおこしの考え方までいろいろヒントは得たと思う。

その日の夜、視察を終えた我々は青森の夜に繰り出した。何軒目かのスナックで、そんなこと何もいかなかったのに、しじみ汁が出された。おいしかった。

(伊藤 聡)

「おとう生まれのしじみです。」

しじみDay ー大任町しじみ試作品展示会

「花としじみの里づくり」に取り組んでいる大任町が、9月24日（日）、JR博多駅で街頭キャンペーンを行った。

〈「花としじみの里づくり」イメージキャラクター初登場〉

23日の晩から九州には台風が接近し、中止かと心



大任町の特産品、しじみは早々に売り切れご免



“しじみ Day” イベント会場

配されたが、24日朝、何とか福岡直撃は免れることができた。

キャンペーンは早朝7時半から、大任町の法被を着た町職員等スタッフが、しじみの形をした町のパンフレットを配布、試作品のしじみの佃煮を試食してもらい、アンケートで消費者の反応をみるというもので、町のイメージアップと、養殖や加工の企業化を検討しているしじみへの消費者の関心を探ることを目的とした。

〈大任町はどこにある〉

大任町は、福岡県田川市に隣接する町である。キャンペーン中には、意外にも「福岡県？、大任町??」という人や、また、「福岡県でしじみがとれるって知らなかった〜」という人も現れて、スタッフが、「大任町は福岡県田川郡大任町でして、大任町の中心を流れる彦山川に、えっ彦山川ご存じですか。そうです、その彦山川にしじみがおるとです。もう、是非ぜひ一度おいでになってください。本当に。」と、ご満悦な様子でPRする場面もみられた。

〈手ごたえはジュウニブン〉

試作品として今回は、しじみとごま、大豆を揚げて醤油で味付けした「豆っこしじみ」、しじみときく

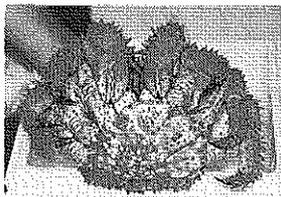
らげの佃煮、しじみと椎茸の佃煮（どちらも名前はまだない）の3種類が用意された。600人分回収したアンケートの結果は、「おいしい」が約8割に達した。早朝から台風にも負けずに頑張っているからという同情票もいくらかはあったようだが、中には「きくらげ、しいたけとあわせた佃煮はありふれている」「いまどきしじみなんて流行らないのでは」といった声もきかれた。

また、町の特産品である生のしじみ、マタタビの実、手作り味噌、手作りこんにゃく、手作りにんにく球、しじみ型丸ボーロ等の販売も好評であったが、消費者は、まず商品一つ一つをよく観察し、本当に欲しいかをもう一度考え、その上で値ごろ感があるならば購入しているように見受けられた。

大任町では、これらイベントでの収穫をふまえ、「大任町しじみの里づくり企業化推進研究会」を中心に、試作品の商品化を検討していきながら、今後もさらなる町の活性化に取り組んでいくこととしている。

（伊藤加奈）

食 場 日 誌

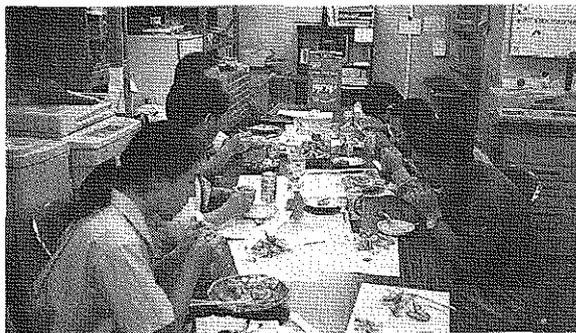


9月×日 事務所で花咲きガニを喰らう。北海道に出張されていた佐賀市文化会館の平尾さんから花咲きガニを送っていただいた。早速、この日

の夜、所員一同集まり小宴会が始まったが、無言のもとにカニはあっという間にみんなの胃袋に収まった。久しぶりに北海道の味を楽しむことができました。平尾さんどうもありがとうございました。 (だ)

9月×日 所員の大分みやげの鯖寿司を食べる。有名な“関鯖”の寿司と聞いて昼食後すぐだったが試食する。「やはり関鯖は違う」と言いたいところだが、寿司にしてあるせいか正直なところよくわからない。というわけで、実際食べに行くことになった。これも現地主義。 (け)

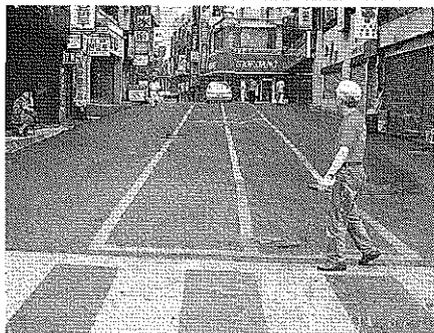
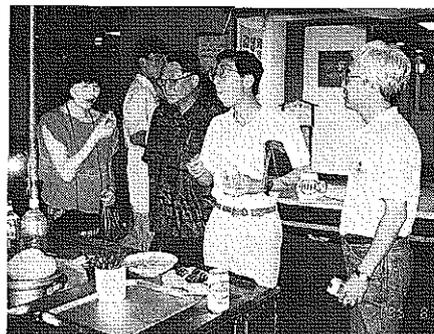
9月×日 弊社のOからの沖縄味覚3点セット(パインナップル、バパイヤ、さとうきび)が届いた。弊社のUがあっという間に上手に切り分け、おいしいパイプが一層おいしくなりました。 (な)



私 の 近 況

■カラスと都市

東京の新宿あたりを朝の9時ごろ歩いていると、活き活きとして獐猛な感じのたくさんのカラスに出くわす。本来最も警戒心が強く、人間が近づけば逸早く逃げるといわれているカラスだが、都市のカラスは簡単には動かない。同じように家畜化してしまっている人間とカラスの同胞意識のためか、あるいは家畜人間よりはまだまだ野生を保持しているという自負心のなせる技か、黒光りした羽根の色つやとい



写真は夕食中のわれわれの仲間と、その場所を翌朝取ったもの。道路にラインがあるが、その中央側に屋台はあった。

い、両足で立った姿といい、ヒッチコックの映画以上の迫力がある。

ところが、そのカラスの勇姿が福岡と釜山にはない。

先日釜山を訪れたとき、夜食は屋台であった。そして翌朝その場所へいってみると、きれいに片付けられていて黄色いラインが残っていた。つまりラインは屋台を出す位置を指定するためのものであった。傍らに自動車の中古バッテリーが置かれていて、「なるほど屋台の照明はバッテリーなのか」と思った。

福岡も屋台の街である。そしてカラスはいない。朝にはきれいに掃除されているし、家庭ゴミも夜の内に収集しているので、カラスがやってきてゴミ袋をつつつくこともない。屋台があると都市として格好が悪いとか、恥かしいとか云う人間の意見もあるようだが、カラスは福岡とか釜山の都市に「住みにくい」と感じているのではないかと感じた次第。

(糸乗貞喜)

久々の外泊達成

9/9~9/10に、会社の「海の家」(福岡市西方の二丈町福吉)に泊まって釣りに行った。

今年2月下旬からは体調を崩して節制の毎日。外泊もままならず、北京・上海ツアーに参加できず(「よかネット」の前号に行った人の感想がうれしそうにのっている)、友人との旅行にも参加できず……といくらでもうらみごとが出てくる。

そんな日々が続いていたが、9/7の夕刊の釣りコーナーに、大見出しで「家族4人でキス122匹」と書いてあるのを見たとき、「最近体調もいいし、外泊して釣りでもしてみようか」という気分になった。また体調を崩せばひと休みすればいいし……。

結局、ぼくは別荘に出かけて、大はしゃぎ。おと

なく外泊どころか夜釣りまでして、そのまま翌日の早朝まで釣りまくり。目標のキスは計62匹も釣ってしまい、帰った夜は、てんぶら→糸づくり→昆布じめ→姿焼きとフルコース。ニタニタ笑いでその日のうちに全部食べてしまった。(尾崎正利)

EM菌入りのガラスの効きめは？

小郡市在住の大渡剛弘さんからのお便りで、以前、本誌でも紹介したEM菌に関する情報をお寄せいただいた。佐賀市にEMガラスなるものを製造しているガラス工場があるとのことで、ご本人曰く、「このガラスで掌をふれない近さで動かすとゾリゾリとした不思議な感覚がはしる……」。早速、佐賀市に行く機会があるときに探してみた。副島ガラスという工房で、EM菌をガラスに混ぜて製造している。なんでも嫌気性が強い菌だから、高温で焼いても死なないそうである。当事務所の糸乗はイボイボがついたガラス片と金魚鉢のような器を購入。イボイボは五十肩の治療器具として、金魚鉢は焼酎を入れてマイルドな味にするため。確かに焼酎はマイルドになったような気がする。

なお、同じ週に九州産業大学の青木先生が事務所にお見えになって、「どんな時代がやってきてもしっかり踏んばって生きていく」という副題の雑誌「季刊・あしのうら」という雑誌を紹介されました。

内容はEM菌の日常的な利用法の実践、EM菌の誕生物語、水のリサイクルなどについてです。

EMガラス、雑誌どちらとも連絡先は下記の通りです。興味のある方はいかがですか。(尾崎正利)

「EMガラス」

製造元＝(株)副島硝子工業

佐賀市道祖元町105 TEL 0952-24-4211

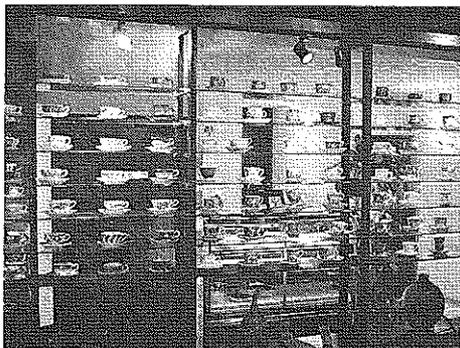
「季刊・あしのうら」

発行＝企画編集ハヌマン・あしのうら発行委員会
大分市大手町3-2-56 TEL 0975-37-0880

〈好きな有田焼で珈琲を飲む～ギャラリー有田〉

佐賀県有田町と言えば有田焼という全世界的なブランドを持った焼きものの町です。毎年5月に開かれる陶器市には全国から70万人もの人が訪れます。まちづくりのお手伝いをするようになって、陶器市以外の日に町に行くようになりましたが、普段は駅前も閑散として陶器市の賑わいが嘘のように思えます。「陶器市以外では町中をうろろする人がいない」、「喫茶店が少ない」、「町民にお客さんを受け入れる意識が足りない」といった町の人の声も聞かれ、これまでの生産中心の町から、焼きものを活用したサービスの展開が課題となっています。

さて、写真は、最近、駅前に喫茶店がないと役所の方に不満を漏らしたら、ちょっと離れたところに良い店があるといって紹介されたのが「ギャラリー有田」です。ここには、約1040個もの珈琲茶碗がガラスの壁に並べられ、その中から自分の好きな茶碗を選んでコーヒー、紅茶などを飲むことができます。



さまざまなカップが並ぶ「ギャラリー有田」

一つ一つ違ったお茶碗を見て選び出すのは楽しいもので、目移りして選ぶのに結構時間がかかってしまいます。気に入ったら、買って帰ることもできます。
(歌丸星子)

■披露宴のスピーチのような……

まちのイメージアップを図ろうと活動している福岡県山田市で、筑豊地域（本号の「三都物語」の地域。なぜ山田市は入ってない！）のまちおこしグループ「筑豊ゼミ」の交流会があり、私も参加した。いつもは「やまだイメージアップ委員会」がひっそりと（？）開かれる活性化センターでしたが、行ってみると何やら明るくにぎやか。屋外にテントを張って、机を並べ、そのまわりはおでんや焼き鳥の手作り屋台が囲んでいるのでした。

普通は講師を呼んで話を聞いたりするらしいのですが、それとは全然違う雰囲気でした。参加者約70名が、飲んで、食べて、話をして、その中で各グループの代表を始め、いろんな人が次々と前へ出て挨拶したり、宣伝したり。そのうち市長も会場へ呼び出され、一大イベントとなってしまいました。

やまだイメージアップ委員会の会長の千代田さんたちと以前から話していた、「披露宴のスピーチの時のような雰囲気の集会をしたい」というのがついに実現した夜でした。
(伊藤 聡)

■長寿社会のまちづくり研究会活動報告

その1：子供達には楽しい？“うらしま太郎”

去る9月24日（日）、イヅカコスモスコモンで行われた「福岡県 ふれあいフェスタ'95」に、福祉体験として高齢者疑似体験“うらしま太郎”コーナーが置かれ、そのインストラクターとしてお手伝いをさせていただいた。

「福岡県 ふれあいフェスタ'95」は「障害のある人

とそうでない人が、“友愛の心をもって共に参加し、触れ合いの輪を広げる”ことにより、広く障害者の社会への参加を促進し、併せて障害者福祉に対する県民各層の理解をより一層深める」ことを目的として開催された。

約40名の方々に体験していただいたが、今回目立ったのは、何度もやってみたいという子供達が出たことで、高齢者の疑似体験も子供達にとってはちょっと変わった遊びのひとつでしかないようだった。「楽しい、面白い、もっとしたい」と言われてしまい面食らった。しかし、介助者を務めてくれた女子大生のお姉さんに付き添われ、至極楽しそうにプログラムをこなす子供達の笑顔を見ていると、少なくとも“ふれあい”には充分役立っているようだし、こういうこともあるのだなと思った一日だった。(富重慶子)

その2：WACアクティブクラブ福岡にも誕生

今回9月28日の研究会では、8月にWACアクティブクラブ福岡支部が誕生したことを受けて、支部長であり、WAC単位クラブ長寿社会のまちづくり研究会の会員でもある松本隆幸さんに、設立の経緯、活動の内容、時間預託制度、今後の展望等について報告していただきました。これからWAC・ACは、交流、ボランティア活動を中心に展開していくとのことでした。福岡支部は全国で16番目の誕生となりました。WAC単位クラブとWAC・AC、会の名称、活動内容は違って、明るくいきいきとした長寿社会をつくっていききたいと願う気持ちは同じでした。

(伊藤加奈)

その3：マリンメッセでも120名が体験

10月5～7日、福岡市のマリンメッセで「先端技術フェア'95」が開催され、“高福祉ゾーン”に高齢者疑似体験コーナーを設けました。スーツ姿のビジネ

スマンを中心に大学生や一般の方が、3日間で約120名高齢化を疑似体験されました。(歌丸星子)

本の紹介

失われんとする一朝鮮建築のために

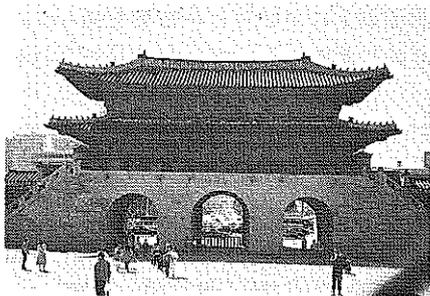
—韓国国立中央博物館(旧朝鮮総督府)の
取壊しをどう考えるか—

「光化門よ、光化門よ、おまえの命がもう且夕に迫ろうとしている」と呼びかけ、「将に行われようとしている東洋古建築の無益な破壊に対して、私は今胸を締められる想いを感じている」と柳宗悦が述べたのは1922年(大正11年)のことである。

この光化門の命が且夕の間に迫ろうとした原因が、総督府の建築の邪魔だということであった。そして柳宗悦は総督府の建築についても、その建てられようとする景福宮が、東京に置きかえると宮城に当たる、という比喩を用いて反対している。「宮城が廃虚となり、代わってその位置に膨大な洋風の日本総督府の建築が建てられ、あの碧の堀を越えて遥かに仰がれた江戸城が毀されるその光景を想像してみてください」「実際美に於いてより優れたものを今日の人は建てる事が出来ないではないか」と光化門取壊しと総督府建築の無謀をとがめている。

本誌の読者は建築家の人が多いと思われるから、この辺の事情については詳しい人が多いと思われるのに、解説じみた標題をつけて申し訳ない気もするが、最近光化門と問題の博物館(総督府)を見、柳宗悦の朝鮮を想う各種の文章を読んだので紹介したかったのである。

話の序に歴史的経過をまとめてみる。



現在の光化門

- ・1895(明治28) 日清戦争終了。下関条約
- ・1895(明治28) 閔妃暗殺事件。
- ・1905(明治38) 日露戦争終了。ポーツマス条約
韓国保護条約。
- ・1910(明治43) 韓国併合条約。
- ・1912(大正元、2) この頃総督府の建設設計される。
- ・1916(大正5) この頃総督府着工。
- ・1919(大正8) 3.1事件。韓国の独立万才を叫ぶ
運動が勃発。
- ・1919. 5. 11 柳宗悦「朝鮮人を想う」読売新
聞。柳は全集の解題で「3月1日京城を中心にして
朝鮮の各所に起こった所謂騒擾(ソウジョウ)事
件に対して、誰も不幸な朝鮮の人々を弁護する人
がないのを見て、急ぎ書いたのである」と述べて
いる。
- ・1920. 4. 10 柳宗悦「朝鮮の友に贈る書」
- ・1920(大正9) 「彼の朝鮮行」改造10月号。
- ・1922(大正11) 「失われんとする一朝鮮建築のた
めに」改造9月号。上記2論文は、総督府の建築と
そのために光化門を毀そうとしていることに対し
て、はっきりと批判をしている。
- ・1925. 10. 1(大正15年) 総督府落成式
柳宗悦がこれらの文筆によって朝鮮の建築を守る

うとした時代は、日本が軍国主義へひた走った時代であり、我孫子の家へ「角袖が来ているんです。…特高課から派遣されて来たんです。四人、五人ぐらいずつ来てました」(全集6巻月報、柳兼子夫人に聞く)といったことや、「渡鮮する毎に警察から尾行される危険な人物」とされた(四十年の回想)ことなどが日常のこととなった。(角袖とは和服を着た私服刑事のこと)

そんな中で柳は「今日光化門と勤政殿との間に実に膨大な西洋建築が総督府の手によって建ちつつある。然も位置はやや西側に片寄って、旧時の秩序を少しも省みることがない。さしも大きな正殿も今日は門を通して見ることさえ出来ぬ。否、今日では既に勤政殿の全景を正面から見る如何なる位置もなくなったのである。何たる無謀な計画であろう(彼の朝鮮行)」と、建築物としても、街の配置などから見ても無謀だと述べている。

これらの文筆活動は海外に英文訳で紹介され、朝鮮訳も京城「東亜日報」で報ぜられた。もちろん「原文は大変な伏字であった(四十年の回想)」のである。「しかし総督府も黙殺できなくなったのか、後年何人か私に次のように述懐した。『君のおかげで総督府は20万円の出費をさせられた。』』というのである。取毀しをやめて、他に移したので、その移転費の事であった(四十年の回想)」と述べている。

現在起こっている総督府建築の取毀し運動について、「今博物館として役立っているだから、そこまでしなくても」といった考え方もあると思う。しかし柳も言っているように、あの場所に重々しく威圧的な西洋建築は似つかわしくない。何よりも気になることは、日本が韓国より早く西洋の模倣ができるようになったことを自慢し、その上その模倣を押しつ

けようとしているように見えることである。せめて優れた「東洋の美」をつくり、あの王宮の中に新しい美をつくらうとしたのならよかったのに、という思いが強い。

以上、柳宗悦の朝鮮論を紹介した。「朝鮮の友に贈る書」と「失われんとする一朝鮮建築のために」の2論は『民芸四十年』岩波文庫に収録されている。他の文章は『柳宗悦全集第6巻』（筑摩書房）を見ていただきたい。

おわりに光化門の運命にふれておく。柳の一文によって救われて、東側の建春門の北に移築された。しかし朝鮮動乱（1950年）で焼けてしまった。今の門は1969年に元の位置にコンクリート造で復元されたものである。（糸乗貞喜）

「入門ビタミンC健康法」

監修 村田 晃（佐賀大学教授）
 編著 ビタミンCと健康を考える会
 出版 さが春秋社

ビタミンCと健康との関連について、長く研究を進めてこられた村田先生監修のこの本は、ビタミンCに関心はあるが、ビタミンCのことをよく知らないという人を対象とした“ビタミンCの入門書”で、ビタミンCの多彩なはたらきと驚くべき効果をわかりやすく、しかも楽しく理解できる本です。例えば、「人の体をひとつのダムを考え、このダムから絶えずビタミンCがあふれ出すような状態を作り出すことによって、恐ろしい成人病を回避し、“病気にならない体づくり”が実現する」など。巷には、ビタミンCの効用について書かれた本が数多く出回っていますが、この本は他と比較しても、ビタミンCの科学知識と

ともに、その想像以上にすばらしい効果を持っていることなどが巧妙に説明され、実にわかりやすい本となっている。

（佐賀県 原子力安全対策室 徳淵康憲さん寄稿）

お知らせ

福岡でサルブリを見ることができます。
 「韓日古典音楽のふれあい」

日時：平成7年11月23日（祝） PM2:00～4:30
 会場：アクロス福岡（福岡市天神）
 主催：（財）西日本文化協会 TEL 092-713-6451

編集後記

よかネットも発行以来、まる三年経ち、18号を迎えることができました。読者の方からも、楽しいお便りを始め、提案など様々なご意見を頂き、有り難く思っています。ところで食場日誌では、我々だけでは知らないものがまだまだあると思います。これはというものがありませんでしたら、年に一度のパーティだけでなくいつでもご紹介して下さい。（べ）

よかネット NO.18 1995.11

（編集・発行）

（株）九州地域計画研究所

〒810 福岡市中央区天神1-15-1 日之出ビル6F
 TEL 092-731-7671 FAX 092-731-7673

（ネットワーク会社）

（株）地域計画建築研究所

本社 京都事務所	TEL 075-221-5132
大阪事務所	TEL 06-942-5732
名古屋事務所	TEL 052-962-1224
東京事務所	TEL 03-3226-9130